

「勉強が苦手だからやっても無駄」をテクノロジーで支援する

公立中学校に通っていた A さん(15 歳)は、第一志望の高校に見事合格した。A さんはスノーボードやフットサルなどの運動が得意で、全国大会で優勝するなど運動面で非常に優れた力を持っている男子生徒。しかし、中学 2 年生の冬頃までは、教員に対して反抗的な態度をとり、勉強に関しては「自分は馬鹿だから勉強なんてやっても無駄」と自己否定的な発言を繰り返し、授業もあまり聞かず、宿題もしない生徒だった。そのような状況から、テクノロジーも活用した学習方法を取り入れたことで、成績を徐々に上げ、学習意欲が向上し、自信をつけていき、第一志望の高校の合格につながっていった。

■ 苦手の特定とそれに合わせたねらいの設定

A さんは小学生の頃から特に国語が苦手だった。文章を読んで作者の意図を読み取ることが苦手であり、作文など文章を書くことにも強い苦手意識があった。また中学生になってからは、英語への苦手意識も強かった。

特別支援学校で教員を務めるかたわら地域の子どもに勉強を教えていた関口あさか先生は、A さんと出会い、学習のサポートをすることになった。まずは A さんの苦手さを特定するために、読み書きの速度や正確性を評価するキット「URAWSS (ウラウス)」と「STRAW (ストロウ)」を実施したところ、文章を読むスピードが遅い傾向にあることが確認できた。また普段の学習を観察し、文章を書くことへの課題も確認していた。そこで先生は、3 つのねらいを定め支援を行っていくことにした。

- ・「勉強への苦手意識」を軽減し、学習意欲を高めること
- ・自分に合った学習方法を身につけること
- ・作文など文章を作ること、記述する力を高めること

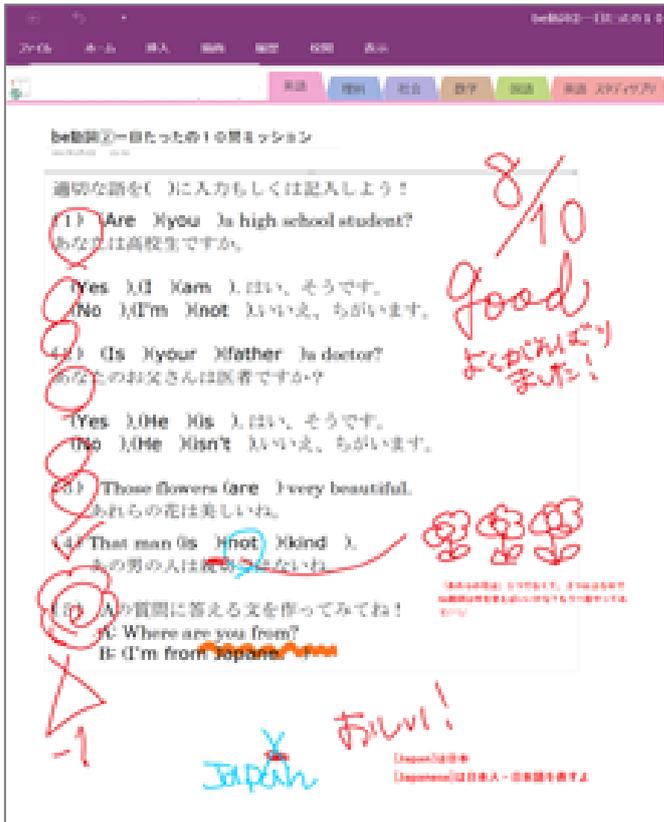
■ やりやすい方法で英語の課題に取り組む

関口先生と A さんは、2 年生の冬から本格的にタブレット PC を導入し、デジタルノートアプリ OneNote で共有ノートを作成し、1 日 10 問の英語の課題をやり取りすることを始めた。関口先生が毎日 10 問ずつ課題を出し、A さんがタブレット PC で解答した。この方法の背景には以下のような理由やねらい、工夫があった。

- ・A さんは鉛筆で文字を書くことに苦手意識があったため、キーボード入力で解答できるデジタルノートアプリを使用した。書く負担を軽減することで、本来身につけたい英語の読解力や表現力を身につけることに集中できるようにした。
- ・A さんは読むことに困難さがあったため、OneNote の読み上げ機能を使い、音声で聞くことで内容をさらに理解しやすくした。
- ・読み上げ機能を使うことで、英語の発音も確認できるようにした。
- ・意味のわからない英単語はタブレット PC ですぐに意味を調べることができた。
- ・タブレット PC を使うことで、時間と場所にとらわれずに学習することが可能だった。スケートボードの練習の合間に、スケートボードパークのベンチやスケートボードに座りながらタブレットを広げて勉強することができた。少しの空いた時間を見つけ、場所を問わず勉強できる環境は、A さんにとって受け入れやすく、スポーツ中心の彼の生活にも

自然と入っていった。

・共有ノートの機能を使うことで、離れた場所でそれぞれ都合のいい時間に、同じノートに対して、先生はPCで課題を出し、AさんはタブレットPCで解答する、ということができ、お互いの負担が少なかった。

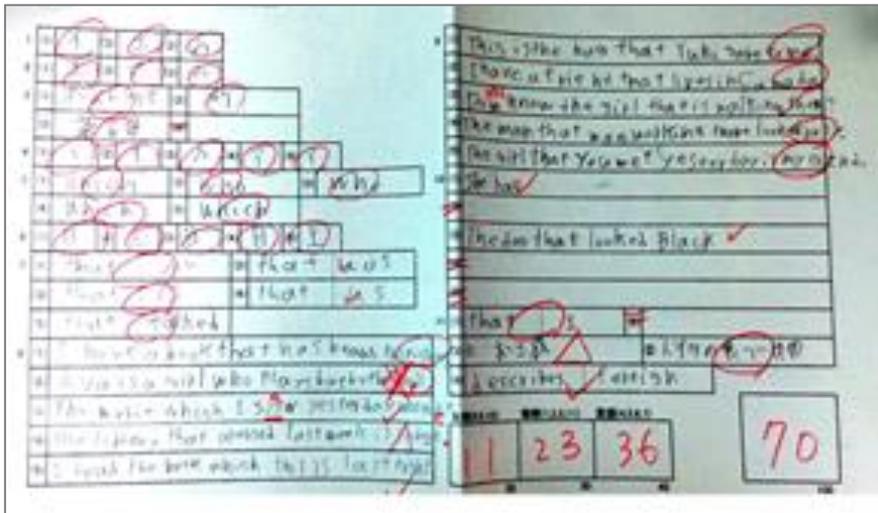


毎日10問ずつやりとりをしたOneNoteの共有ノート

紙の問題集と鉛筆での勉強は20分と集中力がもたなかったAさんだったが、同じような問題でもOneNote上での勉強は1時間以上も集中して取り組むことができた。また、わからないことがあるとOneNoteに質問を書くようになり、自ら「勉強会をして欲しい」と先生にメッセージを書くまでになった。OneNoteでの学習を始めて1か月後には学校の宿題にも取り組むようになっていった。

Aさんはもともと何冊も問題集や教科書での勉強が難しいと思うこともあり、タブレットPCでの学習に慣れてからは、英単語の暗記や歴史学習など様々な勉強をタブレットPCで行うようにしていった。これらのアプリには「手書き」「キーボード入力」「単語を候補から選択」といったいくつかの方法から回答できるものがあり、科目や内容によって、Aさんにあったやり方で勉強を進めることができた。

タブレットPCでの学習を始めるまでは英語のテストは20~30点台だったが、タブレットPCでの学習を始めてから徐々にテストの点数があがり、Aさん自ら「英語を頑張らなくて(5段階中)4以上とることを目標にする」と家族に宣言するまでになった。



以前は20~30点ほどしか取れず苦手意識が強かった英語で70点をとることができたテスト

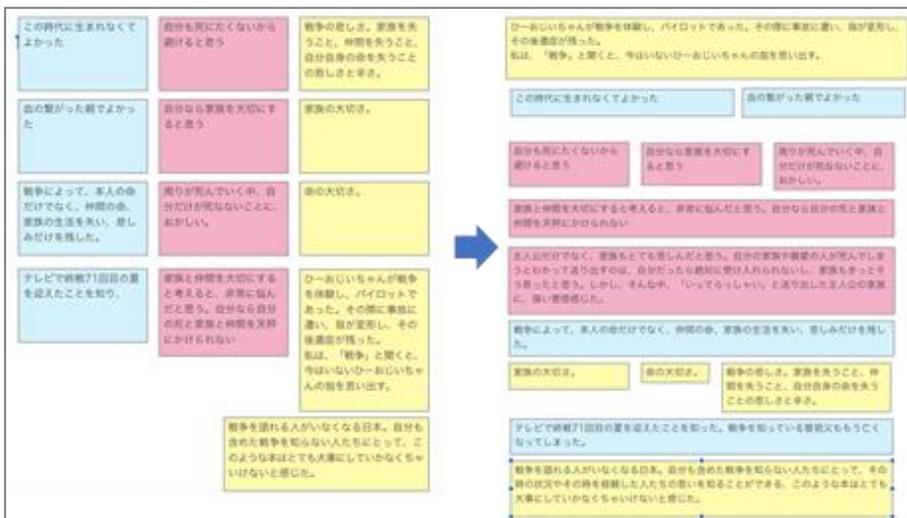
■ 小論文への段階的な取り組み

Aさんの第一志望の高校の受験では、試験科目の一つとして小論文があり、600字程度を書く力が必要だった。文章を書くことが苦手だったAさんは、当初は小論文があるということでこの高校は受験できないと思っていたという。

関口先生は小論文の試験の対策として、最初から600字の小論文を書く練習をすることは難しいと考え、段階的に文章を書く練習をしていくことにした。

- ・ワープロソフトWordのテキストボックスを使い、短い文章で書きたい内容を書き出す
- ・書き出した文章をカテゴリー別に分類
- ・分類したテキストボックスを並べ替えたり、マインドマップアプリなどを使って、話の流れを考えながらまとめていく

このように短い文章を書き出し、カテゴリー別に分類し並び替える過程を踏むことで100文字、300文字、600文字と書く量を増やしていった。



Wordのテキストボックスをカテゴリーに分類し並び替えている様子

小論文対策を始めた頃は、自分で考えた文章を数多く作成する力を伸ばすため、Aさんが一番早く文字を打つことができるスマートフォンで文章を作り、できた文章をWordの原稿用紙のレイアウトに貼り付け、文字数の確認することを繰り返し行った。その後は、Wordの原稿用紙レイアウトにタブレットPCのキーボード入力で直接文章を作る練習をした。そして試験の1か月ほど前からは、実際の試験で行うように紙の原稿用紙に直接鉛筆で文章を書いていく、といったように段階的に目的を決めて学習の仕方を変えていった。初期段階でのスマートフォンとタブレットPCの利用は、間違えてもすぐに修正したり、文を並び替えたりを容易に行え、文章を作る力の手助けになったようだった。



文章を作る学習の様子

苦手意識が高かった文章を作ることに對して、次第にAさん本人も自信がでてきた様子で「自分で文が作れるようになった」と両親や周りの人に伝えることが多くなった。そして1月中旬、Aさんから見事第一志望に合格したというメッセージが、関口先生に送られてきた。

困難さを明確にし、それに合わせた自分の学習方法を見つけ、身につけていったことによって、Aさんの自主学習の効率が上がっていった。そして、成績が上がることに伴って、Aさん自身の「勉強なんてやっても無駄」といった発言や、学校の先生に対する反抗的な態度もなくなり落ち着いていったようだ。

Aさんへの支援を通して、「誰もが自分にあった学び方を知り、その学び方で学ぶことが認められ、本来の力を発揮できる環境づくりの大切さを再認識した」と関口先生は語る。Aさんの「自分にあった方法でやれば勉強ができるんだ」という心境の変化は、紙と鉛筆にこだわらない一人一人にあった学び方を保証することで、救われる子がいることを教えてくれる。

(年齢等は取材当時のものです)